

特 249

610

藤澤衛彦著

櫻年表

伊

伊勢丹



始



//

特249
610



年
表

櫻の詩歌と傳説
花見風俗考



發行所寄贈本



發行所寄贈本

櫻日本

目次

櫻の詩歌と傳説.....	一
花見風俗考.....	一九
櫻年表.....	三四

櫻の詩歌と傳説

櫻と國民性

明治天皇御製

山さくらら匂ふあたりに朝な朝な

たなびきわたる春霞かな。

春の野山を守りたまふ女神佐保姫の恵み深く、うららかなる日、霞の精白玉姫のさまよはれるあたりを見れば、都も鄙もおしなべて、春は櫻の花ならぬはない。

季寄に所謂花の錦は、百花の王である櫻を言ひ、その艶麗なる美性は、遂に梅花の芳烈なる氣韻、牡丹の富貴なる相に代つて、永く日本の國華として賞翫された。まこと、牡丹や梅の傳來的な趣味であるに反し、櫻は本邦固有の花木、われわれはまた先天的に此花を愛する國民性に育て上げられた。

世の中に絶えて櫻のなかりせば
春の心はのどけからまし。

在原業平は、よくまた、われわれの心をも言ひ盡してくれた。

中古以来「花は櫻木人は武士」といはれた此花、敷島の大和心の標識とされた此花は、今に於ても、
春期に無くてならぬ花となつてゐる。

うらうらとのどけき春の心より

匂ひいでたる山櫻花。

—(加茂真淵)—

その豊腹、その高潔、しかも時來れば、繽紛として美しう深く散る風情は、われらが國民性を代表するにふさはしい花として、われわれの上に傳統された。

世界各國を通じて、その國民性を表はす花の數々は、とりどりに其國の文野民俗風尚を現してゐてもしろい。今、その國を代表し又は代表するに足る花の幾つかを示して見よう。

英 吉 利 紅 薔 薇
佛 蘭 西 白 百 合

伊 太 利 雛 菊
獨 逸 矢 車 草
埃 及 蓮 梅
支 那 罌 子 粟
印 度 嚮 日 葵
秘 露

これらに對して、日本の山櫻を愛賞する其優麗典雅の好尚は、自然と他に超越するところありと自負するに足りる。

米國には又、州花といふのがあつて、それが各州の代表となされてゐる。例へば、加州は黄金罌粟、
央州は史州葡萄、華州は石楠、アーカンサー州は林檎花、オクラハマ州は寄生木花、フロリダ州は蜜柑
花、イリノイ州は野生堇、紐育市は薔薇、ボストン市は荳蔻花などと、州を代表し、市を代表する州花市
花といふやうなものを定めてゐるが、統一ある日本では、強ひていへば、春は櫻、秋は菊を、國の象徴
の花とするぐらゐで、廣くはその、櫻花の上にわが國民性を代表せしめてゐる。

殊に、天與の花園を以て目せらるる我國は、地形南北に長く、地味は肥沃で、如何なる外國性の花でも生育しないものはないぐらゐで、盛にこれを移植して日本化させてゐる。櫻が外國化さないで、然も他の國花を日本化して行くといふところにも、亦おもしろい傾向が見られる。

花くはし櫻の花は花といふ

花の君といふ花にぞありける。

——(本居大秀)——

四

櫻よりまさる花なき花なれば

あだし草木はものとやは見る。

——(紀貫之)——

櫻を愛賞する趣味の歴史

櫻の名の、わが記録に見えたはじめは、『日本書紀』で、その允恭天皇の條に、次の歌が見えてゐる。

花くはし櫻をめでことめでば

はやくはめですわがめづるこら。

『萬葉集』に見えてゐる若宮年魚鷹の歌つたといはれる、

處女らが、かさしの爲に、遊士が、鬘の爲と、敷きませる、國のはたてに、咲きにける、櫻の花の

匂ひはもあなに。

去年の春逢へりし君に戀ひにてし

櫻の花は迎へ來らしむ。

右の古歌は、どのやうに古く我等の祖先が櫻の花を愛賞したかを證するものであるが、何をいつてもまだ奈良朝は支那心酔の時代だけに、都に於ては櫻よりも寧ろ梅に重きを置いて、

百敷の大宮人はいとまあれや

梅をかざしてここに集へる。

——(萬葉集)——

など歌はれ、挿されもしてゐたが、平安朝に入ると、民間の櫻を愛賞する一般の好尚は、遂に貴族をも本來の好尚にかへらして、

百敷の大宮人はいとまあれや

櫻をかざして今日も暮しつ。

——(新古今集)——

五

と改めしむるに至つた。

これは、決して、其人達が趣味の推移を語るものではなく、全く日本國民本來の趣味であつたものが、一時傳來の趣味に壓迫されてゐたまでである。

そして、それから、決して、われわれは櫻を忘れず、

一年の花てふ花を集めても

櫻にたぐふ花やなからん。

——(小澤蘆庵)——

の心になつてゐる。かの佐久間象山が、櫻の賦を著して、富嶽と一對にしたのも、まこと當然の歸結であり、平安朝このかた、櫻が紫宸殿の植木となつてゐるのも、この花をわが美の對象とした思想の一端に外ならない。

櫻の故郷と傳説

『萬葉集』時代の櫻の名所は、天之來芽山、龍田山、春日山、三笠之野邊、絲鹿山、絶等寸笑山などであるが、殊に、吉野山は、持統天皇には再三再四の行幸で、柿本人麿なども「御心を吉野の國の、花散

らふ秋津の野邊に」とか「山神の、奉る御調と、春べには、花挿しもち」など歌うて、御歌を奉つてゐる。

『古今集』の序にも「春のあした、吉野山の櫻は、人麿が心には雪かとのみなん覺えける。」と見え、

みよし野の山邊にさける櫻花

雪かとのみぞあやまたれける。

と歌つてゐる。今も、櫻の名所として、天下第一を誇るべきは、大和の此吉野山で、

吉野山霞の奥は知らねども

見ゆる限りは櫻なりけり。

——(八田知紀)——

と歌はるるほど、満山悉くの櫻樹で、

むかしたれかかる櫻の花植ゑて

吉野の春の山となしけむ。

と怪しんだ者は、ただに後京極攝政太政大臣ばかりではない。

八

み吉野の櫻咲きけり帝王の

上なきに似る春の花かな。

——(與謝野晶子)——

吉野には古く離宮があつて、その行幸も應神天皇の頃にはじまり、奈良朝には度々の行幸、殊に持統天皇の飽かぬ御賞觀を賜つてゐる。山城へ御遷都の後は、その事漸く絶えたやうであるが、再び山城の都の遷されてからは一層の賞觀をうけ、文祿三年豊太閤の花見があつてからは、その名ことに高くなつた。

のみならず、吉野への思ひ出は、南北朝争亂の時にさかのぼつて、南朝五十七年間の皇居であつた事を偲ばせる。藏王堂の東なる吉水神社は、後醍醐天皇の行宮の址にして、當時の御製に、

花に寝てよしや吉野のよし水の

枕のもとに石走る音。

この頃の天皇の御起居を察し奉ると、涙湧き出でて禁じ難いものあるを覺える。

歌書よりも軍書に悲し吉野山。

と貞室が詠んだやうに、吉野は花の名所としてばかりでなく、歴史的な名所として殊に感慨深いものも多くがある。

又保元の頃、櫻町中納言といふ人は、非常に櫻を愛して、この吉野の櫻をわが邸内に多く移し植えて常翫したが、花七日の短い壽命を惜み、泰山府君を祭つて祈つたら、三七日まで保つたといふ優美な話もある。

稀にだに來む人待たんわが門を

七日は花に朝ぎよめして。

——(三) 積——

かうして「花七日」の詞は、かなり古い。

さて、吉野は「花の故郷」と稱へらるる程の名所であるが、吉野に次いで、初瀬も、花の名所として古い歴史を持つてゐる。

たづね來てここも櫻の峰つづき

九

と歌はれた多武峰も、花と紅葉の名所で、ここから一つ峠を越えて、急に吉野への花の旅は最も興の多いことであらう。

西行法師は、洛西嵯峨に住して、庭前の櫻を愛したが、この櫻、非常の名木で、觀櫻の人々で賑ひを呈すを見て、

花見んと群れつつ人の來るのみぞ

あたら櫻のとがにぞありける。

と詠んで、櫻の精の老翁に咎められた傳説は、謡曲西行櫻によつて、著く世に知られてゐる。

都名所花ところどころ

見渡せば柳櫻をこきませて

都ぞ春の錦なりけり。

京都に行くと、流石に花の名所が多く、傳説の春が偲ばれて床しい思ひにふたがれる。

就中、東山一帯は殆ど花に粧はれて、見る者の興をそよる。清水の舞臺に立つて、散る花の顔にかゝる風情を偲ぶもよし、祇園の夜櫻に篝火の趣きを慕ふもおもしろし。或は花見小路の都踊に、ものいふ花の美しさを、或は知恩院に、ものさびた都の春を慕ひよるもいづれ旅情をそよるものならぬはない。

身にかへて惜むにとまる花ならば

今日やわが世の限りならまし。

——(俊 頼)——

櫻花とく散りぬともおもほえず

人の心ぞ風も吹きあへぬ。

——(貫 之)——

あるは交野の櫻狩、醍醐の花見、あるは洛外の夕ぐれに、

またや見ぬ交野の御野の櫻狩

花の雪散る春のあけぼの。

——(俊 成)——

山里の春の夕ぐれ來て見れば

入相の鐘に花ぞ散りける。

——(能 同)——

一一

古歌を偲ぶよすがも多いが、嵐山を、京都第一の花の勝地とすべきである。見頃は四月中旬、楓や松の間に櫻を點綴した美は、何ともたとへようがない。花の姿は、山と川に影を映して、畫中畫の景致を添へる。

大堰川かへらぬ水に影みえて

今年も咲ける山ざくらかな。

——(景 樹)——

舊都の櫻傳説の櫻

舊都はことに言ひ知れぬなつかしさを花の命につなぐも、その古の奈良の八重櫻は、今奈良師範の校庭に名残を止めて、

奈良七重七堂伽藍八重櫻

——(芭 蕉)——

の趣も、四月四邊の雜沓に漸く俗化し、却つて、京都より奈良に向ふの途次、宇治川に臨んで平等院

に源三位の末路を偲び、靜に、「埋木の花咲くことも」の歌を偲んで、逍遙するの趣深きを思はしめる。舊都の花に、更に偲びいづるものは、薩摩守忠度の最後を飾つた、例の、

さざなみや志賀の都は荒れにしを

むかしながらの山櫻花。

のなつかしさである。

難波津の春も、淀川一帯、櫻の宮にかけて俗化したことは非常のやうで、忠度について偲ばるゝ敦盛の傳説どころ、播磨國は須磨寺の若木の櫻も、そのいかがましい制札ばかりで、花は却つて、八重櫻の名に取られた形にある。

山陰地方に向ふと、有馬の有明櫻、安來に社日櫻の名木があるが、物語では、伯耆の兒島高德が、備前と播磨の境なる舟坂山に、後醍醐天皇の臨幸を待ち奉り、主上を奪ひ奉らんとしたが果さず、美作の杉坂に到れば、時已に遅く、主上は院庄に入らせたまふと聞いて一族力を失ひて散り散りになつた時、高德は、せめて此所存を上聞に達せばやと、行在所のお庭に忍び入り、大なる櫻樹の幹を削つて、

天莫空勾踐

一三

と書き付けて、その忠誠を知られたといふ。

轉じて、奥州勿來關の故事も、これらの風流なる櫻に關する傳説と共に國民にあらたなるもの。八幡太郎源義家は、バカリバカリと馬蹄の音もゆるやかに、常陸と陸奥の境なる勿來關に差しかゝる。折ふし櫻花路を挟みて咲き亂れてゐる。義家は馬を靜に打たせて、のどやかに花下を過ぎ去く。忽ち東風颯と吹き來つて、無數の落花さながら雪の舞ふが如くに、彼が鎧の袖に繽紛狼藉する。彼はなつかしげに見やつて、

吹く風を勿來の關と思へども

みちもせに散る山櫻かな。

と轡を按じて詠じる。その風情の雅懷は、永く文人畫伯の題材となつて、餘情極まりなからしめる。近世、此關址に碑を立て、此事を記し、季鷹の次の一首を刻むといふ。

ちよろづの仇に向ひしものふも

花さそふ風はすべなかりける。

古より今を貫いて、われわれの胸に流るゝ多くの思出は、このやうに多いのである。

東都花の名所名木と傳説

都が東京に遷されてから、未だ六十餘年に過ぎないが、徳川氏三百年の幕府は江戸にあつて、事實首都の觀があつたので、大江戸の花の名所はそれぞれに數へ立てられ、『東都所觀櫻三十三品』を稱へて、(一)鳴子の淨圓寺、(二)麻布の長谷寺、(三)小石川の傳通院、(四)大塚の護持院、(五)駒込の海藏寺、(六)小石川蓮華寺、(七)御厩谷佐野屋敷、(八)谷中延命院、(九)廣尾天現寺、(十)早稲田五智堂、(十一)大久保保善寺、(十二)谷中養福寺、(十三)小石川牛天神、(十四)目黒祐天寺、(十五)牛込の穴八幡、(十六)谷中の維平寺、(十七)上野嚴照堂、(十八)上野願王院、(十九)上野等覺院、(二十)青山の梅窓院、(二十一)上野護國院、(二十二)千駄谷仙壽院、(二十三)青山最勝寺、(二十四)牛込光照寺、(二十五)市ヶ谷八幡(二十六)上野清水堂、(二十七)駒込吉祥寺、(二十八)瀧野川辨財天、(二十九)目黒稚宮八幡、(三十)田端の興樂寺、(三十一)根津權現堂、(三十二)湯島天澤寺、(三十三)廣尾の光林寺をあげたが、昔の佛の其儘であるものは少い。然し、その所々に古き江戸の匂ひをとめてをらぬでもないから、故策の興を現今に比べらるべくこれらの社寺を尋ねるのもおもしろいことであらう。

傳説の名木としても、淀橋柏木圓照寺内の右衛門櫻（柏木右衛門佐頼季、平忠常兄弟追討の功によつて賜はる館の名木）、澁谷金玉八幡社境内の金玉櫻（源頼朝、藤原泰衡征伐のため下向の時、此地の領主澁谷高重の館に馬を寄せ、彼の養父である金玉丸——土佐坊昌俊といはる——の忠義を思召し、其名を末世に遺すべしとして社の瑞籬に櫻一本を植えて金玉櫻と名くといふ。）その他、上野の大佛櫻、麻布岡の櫻、傳通院沙汰止櫻、本門寺會式櫻、芝功運寺の絲櫻、白山の旗櫻などの、僅に其葉などによつて名残を止めるのみであるが、櫻の名所としては、上野、飛鳥山、向島など段々にある。なほ數へ立てれば、靖國神社境内、小石川植物園、清水谷公園、三宅坂附近より、辨慶橋あたり、葵橋附近、英國大使館前、芝公園、濠端、江戸川べりなどがあらうが、何といつても上野から道灌山を経て飛鳥山に續く花と、淺草から言問橋を向島に渡り、隅田公園を堤について、三園、牛の御前、長命寺、秋葉社、白鬚、木母寺、梅若塚、百花園と尋ね歩く花であらう。

上野は清水堂のあたり、「井の端の櫻あぶなし酒の酔」と、秋色女が一句してから名高くなつた名木植ゑつぎの秋色櫻の附近から櫻の山となり、慈眼堂の絲櫻、掃鉢山の鬱金櫻と、彼岸が咲き、吉野が咲き、そして八重に續く、花見る人も此處が一番上品で、道灌山、飛鳥山は古木も多いが、頗る俗化した。向島に至つては、その昔、常陸國櫻川の櫻、數百株を移し植ゑた趣は更に無い。

櫻の老樹と傳説

櫻の老樹に傳説が伴つて、その樹の花の上に一層その傳説を偲ばしむるものもそれは多い。

例へば、宮城縣柳津町所在の葛西大膳の妻遺愛の雫櫻、同縣伊具郡所在の義良親王移植の櫻、村上天皇が勅旨を以て神社の山緒を尋ねられたといふ福島縣下磐梯神社境内の翁櫻その他がある。世に所謂神代櫻といふ古木、御所櫻などいふ天皇御遺愛の名木、英雄が櫻をその木の上に立てたといふ旗立櫻、英雄、美人の最期を惜みその靈を慰むるために墓畔に植ゑたと傳へる、例へば、田村將軍がその姫王女のために植ゑたといふ山形縣東置賜郡伊佐澤村の久保の櫻、蒲冠者範頼の墓畔にある武藏の蒲櫻、その他さうした傳説のある名木は諸國に頗る多く、櫻の古址としての滋賀花園「懷風藻」に「櫻柳分含新」と謳はれた長屋王園池の櫻、惟喬親王が交野の御狩に供奉の在五中將が名歌をよみいでた渚院の花盛り、上西門院の女房兵衛局が西行法師と歌問答した白川法勝寺御幸の櫻、禪僧學匠横川和尚が「一枝晴雪滿衣香」と叙した平安城西の普賢堂櫻、叡山の僧宣有が心經を捧げて花木のために愛清の心をいたした榮光坊の櫻は、今ありやなしや。御階の櫻、清涼殿御前の紅櫻神泉苑の櫻はいともかしこし、諸國諸地方林子が栽ゑた櫻が峰の櫻に準ずる傳説の類は頗る多いが、とりわけ、「その名木に絡まる傳説が現代に物をいつたのは、加賀金澤の松月寺の櫻である。この櫻は、佐渡の物言櫻と共に、古來切れば血が出るといはれて何人も觸れることを禁ぜられ、西川如見の『怪異辨斷』などが、血ではない一種老木の樹葉であると説明した後に於ても、藩主もなほ一枝を折ることが出来なかつたものであつたが、電車の交通の妨害になるといふので切らうとした時、金澤市民は恐るべき祟りがあるとして、反對の叫びは、遂に市民

全體の聲として勝利を制し、電車をして松月寺の名木櫻を避けて通らしむるに至つたことである。

京都地方に至つては、一木一木に詩歌を偲ばしむる傳説の櫻があつて、身にかへて惜むにとまる花ならばと詠じて、今日やこの世の限りを偲んだ俊頼卿其他、交野の櫻狩に、醍醐の花見に、花の雪散る春の曙にあこがれた人々の物語は盡きずであり、後醍醐天皇が、住吉慈恩寺の八重櫻に再び御輦をかへされたといふ有名な車がへしの櫻にも比すべく、たゞさへ見かへらるゝ櫻に乏しくない。それらのうちに於ても、日本の各地に老櫻として國寶にあたひする櫻は、大正十年の調に於て七十七木の多きを算し、集團としての櫻は、鐵道省の調査に於て今日二百五十個所以上の名所を持つてゐることが知られる。

花見風俗考

櫻狩から花見へ

花暦を尋ねて、四季折々の花を觀て樂しむことが、平民の行樂となつたのは、およそ江戸時代のことであるといつてよい。然しずつと古く、櫻狩は、平安朝時代の大宮人が、櫻かざして今日も暮らした長閑けき行樂以前に遡る文献はある。

履中天皇の三年、天皇、皇妃と御船を磐余市磯池に泛べられ、御宴を催したまふに、不思議や時ならぬ櫻の花が御盞の中に落ち散つた。天皇、こは何處の花ぞと探し求めたまふて、掖上の室山に櫻花の開けるを知しめし、よりに皇居を磐余稚櫻宮と名づけたまふと、『履仲記』に見えるのは、その年十一月の返り咲で、春、櫻のために花下に宴を賜つたのは、嵯峨天皇の弘仁三年、神泉苑に幸したまうた時に起るといはれ、それより、花の宴といふことが恒例の儀式と定つた。

その頃から、櫻は、國都を象徴する花とされてゐたようで、『古今集』ならの御門の御歌

ふるさとゝなりにし奈良の都にも

色はかはらで花は咲きけり。

とある御意の上にも拜される。

その後、一條天皇の御代の官女伊勢の齋主のむすめ大輔が、奈良の舊都から八重櫻を伐り採り薶に活けて献上した折の即詠として、百人一首で普遍的に知られてゐる、

いにしへの奈良の都の八重櫻

けふ九重にほひぬるかな。

の歌に、そぞろに舊都の花を偲ばれた上東門院の妃は、その元樹の八重櫻の老木を新都に移し植ゑよと御命じになつたところ、八重櫻の地主であつた奈良の衆徒たちの反對にあつて中止された。上東門院は、却つてこの衆徒の反對を優しきものにおぼされ、更めて伊賀國餘野莊をば衆徒に與へて、それより後の花の盛り七日の間、八重櫻の番をさせ、通りがかりの人たちの心ない花盗みを禦がしめたので、それより莊の名は花垣莊に呼び改められたなどいふ優しい傳説は、まこと平安朝にふさはしい美しい物語で、この頃の貴族社會は、櫻狩を専ら春の行樂としたらしいが、まだ一般が櫻狩をした風俗はなかつた。降つて、武家時代に至つても、櫻狩は、平民の與らない行樂とされてゐた。天治元年閏二月十二日

白河・鳥羽兩院の法勝寺の春花御覽を始め、寛正六年三月に於ける將軍足利義政の東山・大原野の櫻狩豊臣太閤秀吉の醍醐・芳野の花見に至るまで、花見の行樂は永く公卿・武家の關するところとせられ、平民の行樂となし得なかつた事情にあつた。それが、四民行樂の時代を現出したのは、江戸時代も漸く泰平期に入つた慶安後からであつたと考へられる。

江戸時代初期の士人花見風俗

天正十九年の春、徳川家康が江戸入城の、櫻田に、數百株の櫻樹相連り、一道の清流その間を貫いて霞ヶ關の美觀いふばかりなかつたことは、『江戸名所圖會』より、遙かに遡つて考へられることであるが、當時はなほ戰國のことで、一瓢を携へて花見に行く悠長の人も無く、慶長・元和に入つて、僅に狩野長信の『花下遊宴圖』十二枚に、その頃の花見風俗の態が傳へられるが、それも四民の参加を見た風俗ではない。

寛永の頃は、淺草駒形堂のあたり、並木の櫻が眞盛りで、『吾妻めぐり』に、「よしのの峰の春とてもこれにはいかでまさるべき、云々」と、江戸の春を頌へた文章が見えるが、それも、花見客の行樂を述べたものではない。

鳥原の亂も平ぎ、正雪の騒動も鎮つて、漸く太平の世となるにつれ、士人の花見も盛んになつたやうではあるが、なほ暫くは尙武の氣を失はず、「何事ぞ花見る人の長刀」の風は續いたことで、『色音論』に

『花見遊山には、小身とても鎧をもたせ、侍を召連れ出る、そのうち若き衆もし家來不自由の時は、鎧持も侍もなければ、六法上氣に出で立ち、器量よき草履取召連れ、友達四五人にて出る人はあれど、大かた御旗下衆鎧もたせぬはなし。近年は何かたへも草履取ばかりなりといへり。』と見える近年は、元祿このかたをいへるので、それより前、武士が花見遊山の所謂閑日月の際、なほよく持鎧を離さなかつた風俗には、未だ治に於て亂を忘れない本分を守つてゐたことが知られるのである。

四民行樂時代の花見風俗

かくて、士人の花見の盛大なるにつれ、商人のこれに準ずるものがあり、やがて四民行樂の時代を現出し、天和に至つて花見の流行を來したが、この頃には、櫻田・淺草の花は既に衰微し、墨堤の櫻は未だ植らず、小金井は交通の便が悪くして未だ知られなかつたので、花見の人は、専ら上野に行樂する傾向をなした。

士人も漸く鎧持の沙汰に及ばず、昇平久しきに馴れた風俗は、編笠目深に被ぎ、小袖の裏を紅絹にし、或は眞紅の肌着を袖口長にして、細身の大小、しなりしなりと婦女子の櫻を模するに至つた。

紀綱弛んだ士人の風俗は、忽ち町人の風俗を刺激し、みな争うて華美を競ふ、わけても春の花見風俗は、『紫の一本』に記せる東叡山花見の條に、「黒門より仁王門の並木の櫻の下には花見衆なし。東照宮の御宮の脇後、松山の内、清水のうしろ、幕はしらかして見る人多し。幕多きは三百餘りあり。少きは

二百餘り、このほか被衣立てたる女房の上着の小袖、男の羽織を辨當からげたる細引に通して櫻木にゆひつけてかりの幕にし、毛氈花むしる敷きて酒のむなり。鳴物は御法度にてならず、小唄、淨瑠璃、踊、仕舞は咎むることなし。本町通町をはじめ、石徳なるも、さもなきも、町方にては女房娘、正月小袖といふは仕立てず、花見小袖とて、なるほど手をこめ、結構に伊達なるものすきしたるを着て出るは、花よりもなほ美事なり。花の頃は空曇りて、大かたは晝頃より雨降る。しかれども傘をもささず、小袖をすきとぬらして歸るを、遊山とも、また手柄にもするなり。花の盛りには、どんどめきの石橋よりは、なかなか先へは往かれず。仔細は、江戸下町の者共は、筋違橋和泉橋を渡りて廣小路へかかり來る。湯島小石川小日向筋の者は、池の端の町へかかり來る、黒門前からは下谷よりの見物、谷中筋よりの人、四方よりの集りなれば、ひしと詰りて動きもならず、車坂よりも上り、屏風坂よりも上れば、上野の込合夥しきことなり。』と見えてゐるやうな盛況で、女房・娘たちは、正月に着飾るべき小袖を、その時に仕立てずに、特に花見小袖と稱へて、花見に出る際力めて善美を盡し、伊達に物すきにしたものを、着用したといふありさまであつたから、花よりもその服裝の鮮かであつたことが知られる。

當時小袖幕の風俗は、殊に缺くことの出來ない風流として時人の好尚に上つてゐたと見え、三都共にその一團の花見客には重要視されたやうで、『賤のをだ巻』に、森山孝盛の父二條在番の折、相番のものと花見するとて、町人の許から、女の小袖を多く取り寄せ、小袖幕を打つて伽羅の香をとめありく際、香爐の火で、裾をこがしたため、償金を出したなどといふ記事が見えるのでも知られる。

また花美風俗の一風流として、辻風呂といつて花陰に風呂を立つるものあり、これに入浴しながら花を愛でたなどいふことがあつた。『紫の一本』上野の花見の條に、遺佚といふもの、花見の間に何方へ行つたか見えないので、陶々齋が尋ねて行くと、大佛のうしろのくぼみ、櫻の眞盛りの樹の下に垢風呂をたてて、その中に花を入れ、「温泉水滑らに、云云」と、白樂天の句を口吟してゐた山が記されてゐるのは、如何にも暢んびりした當時の花見の態がうかがはれておもしろい。

御殿山漸盛時代の花見風俗

淺緑の空に霞たなびき、日はうららかに風あたたかく、花信頻りに傳へらるる元祿の春は、花見行樂の最も隆盛となつた時代で、

さくら狩きとくや日日に五里六里

——(芭蕉)——

と吟じた句によつても、粹人墨客の漸く花を尋ねて狂遊する風の盛んになつたことが知られる。少女秋色が、上野の山に遊び、大磐石といふ櫻を見て、酔人を思ふて井の端の櫻を危んだ一句の名聲を博したことのうへには、その風尙がうかがはれ、

花盛り子で歩かるる夫婦かな。

——(其角)——

の句には、家族うちつれての花見の光景が眼にうかぶ。

木の下は汁も餡もさくらかな。

——(桃青)——

平樽や手なく生るる花見酒。

——(西鶴)——

東西花見の流行期に、小袖幕の美観は、この期に於て華奢を盡せしように考へられる。

花見は上野の外に、寛文に櫻を植ゑた御殿山が、東都觀花隨一の名勝地として擡頭し、滿山爛漫たるうちに騒客雲集するの場所となつた。『江戸名所圖會』にいふ、「東海寺北の山續きなり。慶長元和の間、このところに省耕の御殿ありしゆゑに御殿山の號あり。士人相傳へて、この地を太田道眞居住の舊蹟なりといふ。此所は海を臨める丘山にして、數千歩の芝生たり、殊更、寛文の頃、和州吉野山の櫻の苗を植ゑさせたまひ、春時爛漫として尤も壯觀たり。彌生の花盛りには、雲とまがひ雪と亂れて、花香は遠く浦風に吹き送りに、磯菜摘む海人の袖を襲ふ。樽の前に酔を進むる春風は枝を鳴らさず、鶯の轉りて太平を奏するに似たり。云云」同所載看花の圖を見るに、毛氈の上に酒波む酔人あり。または膚を脱いで

鬼事する町人あり。或は幕廻らして歌詠む韻士がある。或は用人、侍士・足輕・中間・女中等數十人を引連れた御姫様などあつて、賑かなこといはんかたもない有様。此地は、明治時代に山尾子爵の所有地となつてから、花時纒に園内の縦覧を許し、飲食歌舞も自由に任したが、昔日の觀更になく、漸次に衰微し、遂に櫻名所としての姿を消してしまつたが、寛文から幕末にかけては絶好な行樂場所であつた。谷山の山脈に連り、品川驛の南端に位置して府下を去る僅に二里餘、東南は品海の連波に山裾を濯ふがやうに、灣を隔てて遠く圍繞する房總の山々、青黛蒼々として東風颯々のうちに、浮ぶ白帆の行くが見える。西の方遙かに富岳を負ひ、眼遙かす筑波の山の美しさ。植ゑられた櫻は大和の重瓣多く、ここは上野とことかはり三絃の自由があつたので、花見の客も幕氈のうちに醉舞する人々多く、夕陽西に春いて晩潮月影を載せ來る頃まで、歸るを忘れ、濛に浮ぶ漁舟點々の光景を肴に、また一杯の連中も少くなかつたといふ。

ところが、幕末、黒船來に驚かされて、品川灣に砲臺を築くにあたり、沿海のその土を採るところが無といふので、俄にこの御殿山を穿つ計劃が立てられ、人夫を役して、春秋行樂の名勝地とされ來つた御殿山は、惜くも、遠く海面に運搬されるために崩し取られ、それで今の五個の御臺場が出來ると同時に、御殿山は全形を失ひ、僅かにその一端を剩すのみとなつて明治に至るといふ大變革を餘儀なくされたので、あそこが昔の櫻の名所とは、今では誰も思ひ及ぶもののない姿となつてしまつたのである。

櫻樹移植時代の花見風俗

花のお江戸の名の起りは、享保・元文・寛保にかけて、諸所に櫻の移植されたことの上起る。

享保に隅田堤・淺草寺境内、元文に小金井・飛鳥山、寛保に新吉原。隅田・小金井・飛鳥山は八代將軍徳川吉宗の道樂氣から發展した植樹によつて名所となり、淺草寺へは新吉原から寄附、新吉原は追つて春の浮れ客の引寄せ策に採用されたものであつたらしい。

隅田堤は花に限らず、四時ともによき地であつたので、遊覽の客は植樹以前にもあつたことであるが、殊にその地に花見流行の時代を展開したのは、むろん吉宗櫻樹數百株を植ゑさせてから後のことだ、『東都歳時記』に、『このあたりの勝景は諸國に聞えて、いちじるしき名どころなれば、先哲の詩歌數ふるに違あらず、記するもまた事あたらしければものせず。抑も此地は、四時變化ありて景趣一ならず、さるが中にも彌生の頃は、長隄櫻ひまなくて、よそ目には一匹の練を引くかとあやまたる。都下の良賤日毎にここに群遊し、樹下に宴を設け、歌舞して歸るを忘るるは、實に太平の餘澤にして、これな江都遊賞の第一とぞいふべかりける。』と見えて、永く花見行樂の地となつたが、その始め、春陽庶民遊覽の地となつたは、吉宗の志によるところが多かつたので、吉宗は、隅田・飛鳥の花時には、近侍の文士に行厨酒果を賜ひて、兩所を遊覽せしめ、「今日は遊人多かりしや、士人も潤澤をうるさまなるや。」など尋ねて、民と偕にその楽しみを同じくしたといふ美談が傳へられてゐる。

さて、浅草寺境内に、更めて櫻が植ゑられたのは享保十八年、新吉原の寄贈樹で、十九年の春大に賑つた。これを千本櫻或は札櫻といつた。當時遊女の句集『さくら鏡』のなかに、

櫻にも出ぬは底なきうつはもの

などの句が見えてゐる。

飛鳥山については、「元文の頃、臺命によつて櫻樹数千株を植ゑさせらる、内には遊覽の便とし、外には芻蕘の爲にす。年を越えて花木林となる。爾より騷人墨客は句を摘み章を尋ぬ。牧童樵夫は秣を刈り薪をとる。殊にきさらき彌生の頃は、櫻花爛漫として尋常の觀にあらす。」と『江戸名所圖會』は記し、『新編江戸志』は、醉客の歌ひ舞ふありさまの興あることを記してゐる。その他林信光の『飛鳥山十二景詩』、瀧魯庵の『十二景倭歌』をはじめ、『江戸砂子』『江戸總鹿子』その他の地誌類から察するも、この地南西の庄園の畑うちつづき、農牛馬の通ひ路に桃李物いはず雲雀轉るさまが、都の人たちには物珍らしく眺められたといふほどで、いつの頃からか、飛鳥山上から、此田圃方面に向ひ瓦投の遊びがはじめられたといふ環境であつたが、幕末に反射爐を設くるために山を殺ぎ、櫻樹を減じ、音無川の末を穿鑿して荒川に注ぐなど、従前の山姿、壯觀を頓に失するに至らしめた。これ製紙場の開始によれるもの

で、文明開化はかくてこの名所からも雅趣を奪ふに至らしめたが、櫻樹の衰頹に反して、所謂花見といふお祭騒ぎはいよいよ盛觀を呈してゐる。

小金井の櫻は、元文年間川崎是孝なるもの、將軍の命を奉じて大和の吉野と常陸の櫻川から移植したものであるが、此地の櫻は、はじめから觀櫻の目的でなく、櫻は水毒を解するといふ傳説から、水を飲む者の水毒にあたらぬようにとの用意のもとに植ゑられたものであつたといふことで、この地に泊りかけて花見に出かける風は寛政後からであるといはれる。『武江年表』に、「小金井村の櫻、寛政の頃は詠める人もなかりし由、古松軒が四神地名録に記したりしが、享和の頃より騷人墨客多く集ひて、毎春遊覽の所となれり。云云」など見えてゐる。

寛政には墨堤の櫻が植ゑ繼がれて益々美景を加へたので、十一年の春、三圍稻荷では花見の客をあてこんでの開屏大祭を執行した。この時紙で造り畫にかいた天狗の鼻のみを製し、これを緒に通して商ふ者があり、非常に流行を極めた。毎日人々争うて買ひ求めるので、亭午にはいつも賣り盡す有様で、花見の客はみなかの烏帽子を被り鼻に掛けないものはないといふ有様で、長堤の春興湧くがごとくであつたことから、年々花見の假面の新案される傾向が助長されて行つた。

新吉原の夜櫻が、鉢植のさくらにはじまつたのは寛延二年であると名所誌類には見えてゐるが、一九の『曲中年行事』には、「漢土には遊女街を花街といひ、また花柳苑と稱して花を植ゑ、柳を育し、萬客を導くの階梯となすといへり。今このさとに花を植ゑるは、寛保元年よりはじまりて、年々に繁榮し

歳々に超過し、日毎の貴遊湖海の賓、花に酔ふ中の町の夕景色は、之もいふべくもあらず、名所の芳野はつ瀬は、少妓の名に奪はれ、飛鳥・日暮里の遊客もここに掠はれて、夜櫻の本にうかれ、後朝の花には巫山の神女が雲かと疑ひ、夕に匂ふ花の香には、李貴人の露はれ出でしかと思ふばかりの道中姿、これは彼にけをさるる風情、實に春宵一刻の價千金にして、ここに脚銷金の穴とやいふべし。」と見えて、多くの花魁の句を記せるなかに、

たかどのの爪音もれつ後夜の花。

松葉屋 瀬川

ちりてんとしてゐる櫻や小盃。

あぶぎ屋 花扇

夜櫻やかさす扇のぬしや誰。

大文字屋 一本

などの句が見えてゐる。

「春夢正濃滿街櫻雲」と、大門口に鶴り出した看板は、里のならひの虚言でなく、今を盛りの櫻を植ゑて、朝顔行燈を點した風は、まこと昔の花ふりかかる仲の町情調であつたといふ。

幕末以來の花見風俗

春信ゑがく水茶屋の笠森於仙は、花の日暮里を背景としての其美しさは花に競べらるる。明和・安永

天明から盛つたこの邊の遊樂は、文化に至つて更に花期の賑ひを示した。この頃の圖を見ると、花下の茶店に、「なめしでんがく」の行燈招牌を置き、山下に、抛つて遊ぶ瓦などを賣るなど古風な様が見える。

『玉花勝覽』の著者露庵有佐が、小金井遊覽の案内に使つてこの地に杖を曳くものを繁からしめたのは文化元年三月で、「遊人每春相倍蓰、野路綿々人肩摩馬蹄連」といふ小金井櫻樹碑の建てられたのが文化七年三月、その頃は、徳川旗下の士の間に於て遠來の花見が流行した。

龜田鵬齋が作書した長隄十里白無痕、訝似澄江共月渾、飛蝶還迷三月雪、香風吹度水晶村。の詩碑が木母寺畔に建てられたのが文政十二年三月、その附記の文に、「隅田櫻花豈徒蟻珠三百斛、玉樹千萬枝、長隄作三十里錦步障」など見えるその盛況知るべしである。

當時の將軍徳川家齋、また花を愛すること深く、所司に命じて名所の枯株に植ゑを繼ぎせしめたことから、花一層の繁華をなした。

この頃から天保にかけて、上野の山では、山同心が筵席を借し香煎湯を賣つた。然し、この山では、夕暮告げる六つの鐘の響きを相圖に、花に別れて山を辭さねばならぬ制度があつた上、雑沓を制し、若し暴行者などあれば直に黒門外に追ひ出すので、婦人は安心して一日の遊興が盡せる故、好んで上野に赴いたが、平民は時限があるのを嫌つて、隅田・飛鳥に向ひ、そこで假裝の戯れを行ふを喜んだ。手習師匠は弟子を數多引き連れ、寺子は日傘をかざし、供は兩掛を擔うて行くうちに、異形の扮裝者、殊に

は葬送の装ひで棺桶に辨當酒肴をしこんで昇ぎゆくなど、或はまた仇討の様に見せて見物を驚かすものなどあり、長命寺・蓮華寺・牛の御前社内には藝人の茶番狂言がある。目かつら賣は花時何處にもゐて男女の別なくこれを購ひ掛けるなど、雑沓を極める中に、一きは目を惹いたのは手習師匠の花見と、上野の春を享樂する御殿女中の群であつた。寺門靜軒は、嘗てその状を敘して、「また見る、宮女伴を結び、翠袖霞を抜き、官雲を簇らす、靚麗股冶を競ひ、妍を闘はす。」(原文漢文)といつてゐる。手習師匠の童男童女一連數百を率ゐるの偉觀は、夙く元祿頃から行はれたと見えて、

手習の師を車坐や花の兒。

—(嵐 雪)—

などの句が見えてゐる。

『東都歳時記』が、江戸時代末葉の行樂を敘して、「俗は立春より數へて七十五日に至るを花開の節となす。國俗山櫻をもつて花の第一とす、故に清明の後をもつて節となすなり。都人士女、軌を方べ、軫を齊しくして、東叡山、飛鳥山、御殿山に往いて花を觀る。幄幕雲の如く布き、盃盞山の如く滿つ、古詩を吟咏し、新歌を賦裁し、縦飲歌吟、日を竟へ、少年遊治絃を弾き清唱す、變遷百戲、以て伎藝を誇る。」と見える光景は、これに明治期の特異の運動會を加へて、今日に傳統する花見風俗の概況である。

花見の名所となつた名所の櫻は、山中に自生して山櫻が所謂櫻の名所として普通のもので、これに白山櫻と紅山櫻とがある。大和の吉野、東京府での小金井、京都の嵐山は白山櫻であり、わが國中部以北の山中には紅山櫻が多くある。その他、彼岸櫻、枝垂櫻、染井吉野、山櫻に對する里櫻等十數種の美しい櫻とその變種があり、天然品種に對する夥しい園藝品種は、夙くから家植の櫻品として珍重され、その出芽の色彩、花色、花形、樹姿に特異の美しさをたゞへられてゐる。この限りなき美しさこそ、如何に世界に移植せしむるも決してその土に止まり難い日本のもので、さうした家植の櫻品は、『古今要見』『怡顏齋櫻品』に各六十九種、『本草要正』に百三十種、『浴恩春秋兩園櫻花譜』に百二十三種、『奇品家雅見櫻花位見立』に百四十七種が記されてゐるほど恵まれてゐるのである。

櫻 年 表

紀元	天皇	年 號	記 事
神代			
五八七	崇神	二十四年	<p>「さくら」といふ名は「花咲く」の「咲く」と同語源であります。その語は、また天孫瓊々杵尊の妃、木花開耶比賣命の御名にかかかります。木花開耶比賣命はよりてまた櫻の神として崇め尊まるるわけです。</p> <p>Lucillus により、歐羅巴最初の Cherry-tree がアジアより持ち来られました。(BC. 74)</p> <p>履中天皇、皇妃と御船を磐余市磯池に浮べられ御宴を催したまふ。時ならぬ櫻の花が御蓋の中に散る。天皇、何處の花ぞと探したまひ、掖上の室山に櫻花開けるを知ろしめし、それより皇居を磐余稚櫻宮と名づけられる。『日本書紀』に「三年冬十一月櫻花落于御蓋天皇爲宮名、故謂磐余稚櫻宮」と見えてをるを見ると、十一月の花のやうです。</p>
一〇六二	履中	三年	
(一〇七三)	允恭		<p>允恭天皇の御代、性氏の甄別を正されましたから後、櫻は初めてその頃の人達の觀賞に上りました。御製に、</p>

(一一三三)	天智		<p>花くはし櫻をめでことめでは はやくはめでずわがめづるこら。</p> <p>遊賀の花園を置かれました。 時の都は近江國志賀郡大津宮でありました。 四季に花咲く櫻を植ゑて、駒を遊ばしめたまひしより、遊賀の花園と申すといふ。 さざ浪やしがの花ぞの見るたびに むかしの人のころをぞ知る。(古歌)</p> <p>天武天皇の御製に、 よき人のよしとよく見てよしと言ひし よし野よく見よよき人よく見よ。</p> <p>天武登極以後、勅して櫻樹若干株を、吉野の大峰の登山口たる金峰山に植ゑました。 その後貴賤男女にして芳山の神祠に祈るもの櫻を植ゑて神徳に報じました。</p> <p>持統天皇、吉野山に再三再四の行幸で、柿本人麿は、御心を吉野の國の花散らふ秋津の野邊に。 山神の奉る御調と春へには、花挿しもち。 等の歌を奉る。</p>
(一一三三)	天武		
(一一三四)	持統		

(一三八四〇九)

聖武

左大臣正二位長屋王、園池に櫻を植ゑて、花の宴を催す。平城朝
翻櫻詩宴のはじめです。

景麗金谷室、年開積草春、
松烟雙吐翠、櫻柳分含新。

〔懷風藻〕王作寶櫻置酒の詩

奈良朝時代、若宮年魚麻呂の歌に、

處女らが、かざしの爲に、遊士が、鬘の爲と、敷きませる、國の
はたてに、咲きにける、櫻の花の匂ひはもあなたに。

去年の春逢へりし君に戀ひにてし、櫻の花は迎へ來らしも。

『萬葉集』に見えてゐる。この時代の櫻の名所は、
天之來芽山、龍田山、三笠野邊、絲鹿山、絶等寸笑山等である。

(一四四三〇四)

稱徳

稱徳天皇、伊勢の不斷櫻を召され、またかへさせたまふ。

この櫻、伊勢國、白子觀音の境内にあり、年中常盤に花を開く一
奇樹。稱徳天皇、珍らしとて禁庭に召されしに、一夜にして枯れし
ゆゑ、御製をそへてかへし植ゑかへさせたまひしに、枝葉再び生ひ
茂りてもとのごとなりしといひ傳へらる。

御製

誓ひあれば前も櫻の花なれば

見る人さへや常盤なるらむ。

(一四四六一)

桓武

その後、宗祇の句に

冬さくは神代も聞かぬ櫻かた。

平安朝以來櫻が紫宸殿御前の植木となりました。(左近の櫻)

その頃民間の櫻を愛賞する一般の好尚は、貴族に及び、

百敷の大宮人はいとまあれや

櫻かざして今日も暮しつ。

の歌をつくるに至りました。又紀貫之の歌に、

櫻よりまさる花なき花なれば

あだし草木はものとやは見る。

『萬葉集』二十卷出づ。

見渡者春日之野邊霞霞立開艶者櫻花鴨。

春野爾爾棚曳咲花之如是成ニ乎爾不逢君可母。

平城天皇の御製、『賦櫻花』一篇は、當時の櫻に對する觀賞の深さ

がうかがはれます。

昔在幽岩下

光華照四方

忽逢攀折客

一四四五

延曆四年

(一四四六六)

平城

合ミテ笑ハシ互ニ三ニ陽ニ
送ハシ氣ハシ時ハシ多シ少シ
乘ハシ陰ハシ復ハシ短シ長シ
如何ハシ此ハシ一ニ物ニ
檀ハシ美ハシ九ニ春ニ場ニ

この頃櫻の歌多くよまる。

吉野山の山靈より、一童女に託しく告ぐるものがあつたといふ傳説があります。「我は櫻を愛するの神なり、今より以後櫻を栽る者は立所に是を罰せん。」と。山人は畏みて、櫻を神木となし、それより一花も摘まぬ掟としました。今日の吉野の花の盛んな所以は、この傳説にあるといはれます。

嵯峨天皇、弘仁三年春、神泉苑に幸ましましたし、花樹を御覽あそばし、文人に命じて詩を賦せしめ、賞祿を賜ひました。

これが花宴之節の始めであります。

待ミ花ハシ宴ハシ、花宴何太合ニ良辰ニ、玉管千調無ニ他曲ニ、金疊百味自能醇、臺上美人奪ニ花彩ニ、欄中花綵如ニ美人ニ、人花兩兩共相對、誰得分明偽與ニ真ニ、借問花節有レ期否、花開花落億萬春。

〔凌雲集〕小野岑守の詩〕

その後の歌に、このことはしばしばうたはれてをります。

(一四六九)

嵯峨

弘仁

一四七二

弘仁三年

(一四九三)

仁明

(一五〇九)

文德

ちはやふる神の泉のそのかみや
花をみゆきのはじめなりけり。

〔年中行事歌合〕宗時〕

弘仁三年十一月櫻の花の返り咲きで、春の櫻のために、花下に花の宴を開くことが恒例の儀式と定る。

清涼殿の東二三歩のところに、紅櫻を植ゑさせられました。

惟喬親王、河内國交野に御狩の時、清涼院の花盛に逢ひ、供奉の在五中將が名歌をよみ出でしことは、伊勢物語に見えてをります。今狩する、交野の清の院の櫻、ことにおもしろし、その木の下におりみて、枝を折つて、かざしにさして、歌よみけり。かの右馬頭なりける人のよめる、

世のなかになべてさくらのなかりせば

春のころはのどけからまし。

となんよみたりければ、或人、

散ればこそいと櫻はめでたけれ

うき世になにかひさしかるべき。

清院の櫻は、『弘安百首』に次の歌をのせてゐる。

かたのはま清の櫻いく春の

たえてといひし朝に咲くらむ。

(一五五八)

清和貞観

わだつみの渚の岡の花ざくら
まねきぞよする沖津しら浪。

源臣明朝臣

南殿の御前の左近の櫻が枯れ、根から縊かに崩れ出でました。南殿の櫻のこと。また御階の櫻とも稱へます。紫宸殿巽の角にある。右近の橋と共に左右の將ら列をなす。しるしの樹、櫻枯るれば左大將これを植うるならはしでありました。よつて、坂上胤守勅を奉じてこれを守り、枝葉再び盛りとなるといふ傳説があります。いにしへの雲井のさくら種しあれば
また春にあふ御代ぞしらるゝ。

(左近大將爲教)

藤原良房、「染殿の後の御前に、花瓶に櫻の花をささせたまへるを見てよめる、(古今集)

としふれば齡は老いぬしかはあれど
花をし見れば物思ひもなし。

彼こそ、藤氏一門榮華の基をひらいた人で、染殿の後は彼の女、清和天皇を生みまつたために、文德天皇の遺詔によつて、人臣にして初めて太政大臣攝政となつた人であります。

清涼殿御前の紅櫻が枯れかかりましたので、特に詔して植ゑつが

(一五五七)

宇多寛平元年

れました。その花の北に五粒松があり、花の南に竿竹がありました。

我君毎レ遇春日每レ及花時、惜レ紅艶以叙レ歡情、散レ麗香以廻レ恩眄、此花之遇時也、紅艶與麗香而已、
(菅公「春惜櫻花」應制の詞より)

上野峰雄の哀傷抄に、

深草の野邊の櫻し心あらば
今年ばかりは墨染にさけ

この歌は、寛平三年正月十一日に薨じた關白藤原基經を、深草山に葬つた時の歌であります。それで、その年の花は黒く咲いたとか傳へられ所謂墨染櫻のもとをなしてゐます。

紀友則、吉野山に櫻を見る。時の歌、

三吉野の山邊に咲ける櫻花
雪かとのみぞあやまたれける。

菅原道真、太宰員外帥に左遷されての後によめる。

櫻花ぬしを忘れぬものならば
吹きこん風に言つてはせよ。

これは、「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花」といはれた飛梅と共に名高いもので、「天神記」の「櫻は枯るる云云」といふのは、これが

一五五一

寛平三年

一五六一

醍醐延喜元年

らであらう。北野の末社十二所中に、櫻葉神社といふを祀るも、このゆかりでありませう。

紀貫之等『古今和歌集』撰上。櫻の歌多し。一一、

たれこめて春の行方も知らぬまに

待ちし櫻もうつろひにけり。

うつせみの世にも似たるか櫻花

さくと見しまにかつ散りにけり。

藤原兼輔、『花櫻をる少將』の中に、

そなたへと行きもやられず花櫻

思ふ木かげに立ちよられつつ。

三月六日、御所に於て花の宴を催され、「春夜歌」櫻花こといふ題の絶句を賦せしめらる。

性空上人が書寫山圓教寺に庵を結んでゐた折、或夜天人あまくだりて、庭の櫻をもつて觀世音を作り、此所に安置せよと教へられた。それで書寫山の觀世音は櫻木であるといはれる。

朽せしな妙なる法の花かつら

ながき世かけて頼むちぎりは。

万和門院

一五六五

延喜五年

延喜

一五七七

延喜十七年

一五八六

延長四年

(一六四六)

一條

志賀の花見に、滋賀寺上人、京極御息所の御情にすがる。京極の御息所、御名は婁子、左大臣時平公の女、志賀の花見に、車のすだれの浦風に吹上しを、志賀寺の上人見て、見合たりしより、現のやうにあこがれて、京極の御所に参りてたゞずみ居たりしを、儼よりめして、御手を出させたまひしに、上人御手にすがりて、はつ春の初子のけふの玉ははきはき
手にとるからにゆらく玉の緒。

紀貫之御室に花見し歌を詠ず。

花の香に衣はふかくなりにけり

木の下蔭の風のまにまに。

〔新古今集〕

二月十七日、花の宴を催され、「櫻繁春日斜」の題下に絶句を賦せしめらる。

皇后清凉殿にて高欄の青磁の花瓶に櫻のおもしろき枝を御覽あらせられ、主上清少納言に歌をと仰せられた。

としふれば齡は老ひぬしかはあれど

君をし見れば物思ひなし。

右の歌は古今集に出てゐる前掲、藤原良房の歌の「花をし」を、君

一六六六

寛弘三年

をし」と變へて清少納言が詠じたものであります。清少納言は、『枕草紙』「木の花は」の條に、「櫻の花びら大きに、葉の色濃きが、枝ほそくさきたる。」と記してゐます。紫式部、『源氏物語』を草し、五十四帖に花の宴の卷をなす。なほ理想の佳人としてうつしだせる紫^{むらさきのうへ}上の君を春を愛する女流として、「けだかく、きよらに、さとうち匂ふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろきかば櫻の咲きみだれたるを見るこちす。」とのべてゐます。

寛弘

官女伊勢の齋主の娘大輔が、奈良の舊都から八重櫻を伐り採り、献上の折の即詠、

いにしへの奈良の都の八重櫻

けふ九重に匂ひぬるかな。

この歌でそぞろに舊都の花を偲びいでられた上東門院は、元樹の八重櫻の老木を新都に移し植ゑよと命じたまふ。その折地元の衆徒たちが櫻を惜む心をかへつて優しきものに思して中止なされましたのみならず、更めて、八重櫻の老木のために、伊賀國餘野莊をば衆徒に與へ、それより後、花の盛り七日の間、八重櫻の番をさせ、通りがりの人たちの心ない花盗みをお咎めさせになつたので、そ

一六九〇

後一條

長元三年

れからは莊の名は、花垣莊と呼び改められたといふ傳説があります。

この櫻は、もと興福寺東圓堂の傍にありましたが、今は、そこは師範學校の境内となつてゐます。

春、殿上の花見と稱し、公卿ども花見の宴をなす。その時齊院の選子の御歌、

残りなく尋ねなれどもしめのうちの

花は花にもあらぬなりけり。

とあつたので、春宮の大夫賴宗歌。

風をいたみ先ぞ山邊を尋つる

しめゆふ花に散らじ思ひて。

と返したと見えてゐる。

常陸國に、櫻子といふ美しい少女が磯部明神の社僧に仕へてゐたその母これを探ねこゝに來り、折柄爛漫と咲ける花を見て、狂亂し泣き續けてゐたのを里人等が櫻子に逢はせたのでこの櫻川の名があるといふ傳説が起りました。

源義家は阿部氏征伐のため奥州へ發向の道すがら、江戸小石川白山神社の櫻に旗を立て、八幡宮を勸請せんとの祈誓をした。それよりその櫻を旗さくらと呼ぶに至りました。

(一七〇五)

後朱雀

長曆

一七一

後冷泉

永承六年

一七二六

(一七三二)

後三條

天喜四年

八幡太郎源義家、奥州勿來關にてよめる。
吹く風を勿來の關と思へども

みちもせに散る山櫻かな。
清輔が『袋草紙』に、この年、櫻花宴殿新に成りて、記を上げる
ことが記されてゐます。

この頃花見盛んとなる。花見の歌一二。

高砂の尾の上の櫻咲きにけり

外山のかすみただずもあらなむ。

大江 匡房

初瀬山雲井に花の咲きぬれば

天の川波たつかはと見る。

大江 匡房

一七八四

崇徳

天治元年

この頃の貴族社會は、櫻狩を、専ら春の行樂としました。
天治元年閏二月十二日白河、鳥羽兩院の法勝寺の春花御覽あそば
れる。

後宮みな金銀を以て車を飾り、攝政忠通、太政大臣雅實以下、公
卿扈從、前驅後乘、衣服の美麗極りなしといふありさまでした。時
に、寺僧は、遠近の落花を地に鋪き、車騎はその上を雪の中を行く
やうにして行きました。還御は白河の南殿に向はれて、飲宴を催さ

れ、群臣に命して、和歌を作り、觀を盡さしめたまひました。
崇徳天皇御製

山高み岩根の櫻散るときは

天の羽衣なづるとぞ見る。

西行法師、洛西嵯峨に住して、庭前の櫻を愛したが、その櫻が非
常な名木で觀櫻の人々で賑はふ。

花見んと群れつゝ人の來るのみぞ

あたら櫻のとがにぞありける。

と詠んで、櫻の精の老翁に咎められた傳説が謡曲西行櫻によつて
知られてゐます。

西行法師。法輪寺の南の櫻に一首を詠ず。

ながこと花にもいたく馴ぬれば

ちるふかれこそ悲しかりけれ。

〔新古今集〕

これより、西行櫻の名があります。

西行八上の社に歌を詠ず。

待ちきつる山上の櫻咲きにけり

あらくおろする三栖の山かせ

〔山家集〕

(一八八七五)

後白河

保元

西行法師法勝寺に花を觀る。

おしなべて花の盛りになりけり

山のは毎にかゝる白雲。

西行法師

成源僧上の房中の僧、常住法師といへるもの、觀花の手翫女の花を折りしと嘲けるを砂をよみて驚かす。

山かつは折り見そしらねさくら花

さけば春かと思ふばかりぞ。

(花聞集)

惜しめども散り果てぬれば櫻花

今は梢を眺むばかりぞ

後白河院

櫻町中納言成範卿は殊のほか櫻を愛された方でした。吉野の櫻を姉小路室町の御殿から、西東にかけて並櫻として植ゑ通されて賞翫されましたが、花七日の短い壽命を惜み、泰山府君を祭られて、花の命の延びんことを祈つたところ、三七日まで梢に名残りけるに、千はやふるあら人がみの神たれば
花もよはひはのびにけるかな。
櫻を待ちし人なれば、櫻待の中納言とぞ詔に下されました。

(一八八二八)

高倉

治承

保元

久壽年中源義朝鎌倉龜ヶ谷の館に捕ゑられし櫻を金王丸にたまふ。澁谷八幡宮境内にありし金王櫻がこれであります。

深山木みやまきのその梢とも見えざりし

櫻は花にあらはれにけり。

源三位頼政

平宗盛の寵姫としてその名をうたはれました美女熊野は、老母の病急なるにより、清水の花見の途中より國へ歸る。その節詠じた歌。

いかにせん都の春もをしけれど

馴れしあづまの花や散るらん。

平忠度、平家一門没落の時に詠じた歌。

行き暮れて木の下蔭を宿とせば

花やこよひのあるじなるらん。

同じく最後を飾つて讀人知らずとして選集に入りし歌。

さざなみや志賀の都はあれにしを

むかしながらの山櫻花。

辨慶、若木櫻に制札を建つ。若木櫻は、播磨國須磨寺の前にあります。

(一八四四五)

安徳

壽永

一八四四	後鳥羽	壽永三年	<p>むかし源氏の君須磨にありし時、假舎にうゑし木であると。『源氏物語』に見えてみます。</p> <p>櫻はあなたが世の若木ふり撫く 須磨の關屋の渚つむらむ。</p> <p>定家</p> <p>辨慶 若木の櫻の制札といふもの。その後、播州須磨寺の什物として、展覽せしめられた。その制札の文に、</p> <p>須磨寺櫻</p> <p>此花江南所無也、一枝於折盜之輩者、任天永紅葉之例、伐二枝可剪一指。</p> <p>壽永三年二月</p> <p>とある。この詩は、實は、南宋の陸凱が、梅に添へて江北の范曄に贈つた詩「折梅逢驛使、寄與隴頭人、江南無所有、聊贈一枝春。」といふを振つたもので、後世作爲の物語にすぎないようです。</p> <p>源義經吉野山に隠れ、妾靜捕へらる。頼朝が、靜を召して鶴岡八幡宮にその舞曲を見たのは翌年のことす。靜が、吉野山みねのしら雪ふみ分けて、入りにし人のあとを追ひ迷へる傳説に、大和國源</p>
------	-----	------	---

一八七〇 一八八一	順德		<p>九郎狐の傳説を附會して出來たのが、『義經千本櫻』の淨瑠璃です。</p> <p>吉野の千本櫻は、長峰から一目に見える櫻をいふ。俗に一目千本といひ此地を千本といひます。</p> <p>『吉野紀行』に。</p> <p>吹きまぜて、ふかきやいづれ吉野山 千本に匂ふ花の春風</p> <p>大納言 雅 章</p> <p>また俳人の句一二、</p> <p>富士はゆき花一時のよしのやま。 鬼 貫</p> <p>花ざかり山は日ごとの朝ほらけ。 芭 蕉</p> <p>藤原定家、家隆等『新古今集』を選上。櫻の歌多し。</p> <p>月輪關白櫻を愛す。</p> <p>愛宕山の半道清瀬の上の山にある櫻は、九條關白兼實の月輪寺近世遺愛の櫻と稱され、月輪寺には、また時雨櫻と名く、法然上人、親鸞上人も度々來入して共に稱名念佛を修しました。子弟三師の影像各々自作であるといはれ此院にあります。</p> <p>鴨長明『四季物語』嚴島網の浦蛭子社の淺黄櫻を記す。</p>
--------------	----	--	--

一九八九	後醍醐	嘉暦四年
一九九二	元弘二年	

浅黄櫻、白花水色を帯び、まことに奇木であるといはれる。
藤原定家近江犬上郡春照村大字藤川の櫻を手植す。その餘燼幾代かのものを存す。(周圍一尺五寸、樹高二間半、樹齡三百年)
京極黄門の曾孫大納言爲世卿は、出家して明釋上人と申し、密門に歸依したまひて、嘉暦四年に登嶺あり、花折院に入つて誦經の外他事なくおはしました。或時、櫻の花を折て佛前に手向くとて、誰が爲に折とかは知るさくら花
三世の佛もゆるせ一枝。
歌中に、爲世花折の四字を隠した。其後中納言爲綱卿、此歌を感じたまひて、
折花にそへし言葉のいろ香こそ
世をふる寺の名に残りたれ。
と詠じたまひました。
後醍醐天皇隱岐の國に流されたまふの時、尊澄親王もともに讃岐國に流されたまひ、託間の里に座して愁ひ轟じたまふ。里人櫻をその墓のあたりに植ゑて記念としました。
北條高時の臣佐々木道譽は、近江にある時、六十三人の衆と共に花の下の會を催し錦綉虎豹の皮に座して五尺四方の盤に肴果を盛り

延元		
----	--	--

賭をしました。
吉野藏王堂の東、吉水神社は後醍醐天皇の行宮の址にて御製があります。
花に寝てよしや吉野のよし水の
枕のもとに石走る音。
兒島高德は、後醍醐天皇の潜幸を待ち奉り、主上を奪ひ奉らんと美作國の杉坂に到れば、時已に遅く、主上は院庄に入らせ給ふた。一族力を失ひて散り散りになつた時、高德は、せめて、この所存を上聞に達せばやとて、行在所のお庭に忍び入り、櫻樹の幹を削り、
天莫空勾踐
ときはいないなきにしもあらず
時非無二范 蠶
と書き付けました。
後醍醐天皇吉野に行幸、櫻の御製に、
三吉野の山の山守言問はむ
今いく日ありと花は咲かなむ
宗信、天皇の御製を畏みて歌を奉る。
花咲かむ頃はいつも白雲の
居ると知るべにみよしのの山。
光嚴院法皇の紀伊高野山の櫻に御衣をかけさせたまふ。衣懸櫻と

(一九九九) (二〇二八)	後村上	興國	<p>永く呼ばれて、古木となりても名高し。 とりかけし御衣の雫かしこみて いまでも涙のちる櫻かな。</p> <p>桶 可折</p> <p>夢窓國師甲斐國後の機山公祠の域に櫻を植えました千代櫻。と呼ばれて名高し。</p> <p>新田義興矢口の渡に誘殺さる。里人墓標に櫻を植ゑる。</p> <p>尾張國井原山持寶院は、もと觀福寺と號し、中世頽廢して觀音堂一字のみ存したのを、寛正元年再建しました。弘法大師の加持により出でし轟の井の今も山下にある有名な寺ですが、この折、境内及び近き山々に、櫻楓數千株を植ゑました。</p> <p>香に匂ふ高ねの雲は吹はれて ふもとにつもる花の白雪。</p> <p>栗田 知周</p>
二〇一八 二二二〇	後花園	正平十三年 寛正元年	<p>寛正六年三月、將軍足利義政、東山大原野の櫻狩を行ふ。</p> <p>武田信玄、智勝國師に誘はれて、甲斐國の後の機山公祠の寺域に兩袖櫻を見る。</p> <p>誘はずばくやしからまじ櫻花 さそはんころと雪の古寺。</p>
(二二二五) (二二四六)	後土御門 正親町	寛正六年 天正	

二二五一 二二五四	後陽成	天正十九年 文祿三年	<p>天正十九年の春、徳川家康江戸入城の櫻田に、數百株の櫻樹相連なり、一道の清流その間を貫きて霞ヶ關の美觀いふばかりもなかつた。(昔の霞の關の景觀とは違ふ。昔の霞の關は今多摩郡關戸の霞の關の地)</p> <p>文祿三年二月二十五日豊臣秀吉吉野さくら遊覽多武峯にいたる分れ通の邊に御茶屋を建つ。この時の詠歌世にのこる一巻がある。</p> <p>吉野山梢の花のいろいろに おどろかされぬる雪のあけぼの。</p> <p>吉野山誰とむるとはなけれども 今宵も花の蔭にやどらむ。</p> <p>豊臣 秀吉</p> <p>これより吉野の櫻の名所としての名一層高くなる。</p> <p>豊臣秀吉醍醐の花見を催す。</p> <p>十一月、豊臣秀頼大和吉野、一の橋を再修。</p> <p>前田利家、鹽竈櫻を賞さる。加賀國金澤、地藏堂の後にある。高さ三丈、樹圍太く、地上三尺より分れて五大幹となり、繁枝稠花恰も亂雲の層の如き櫻樹。萬朶春濃かにして、多姿人を惱すに足る。この地數十株の名花あり、虎の尾、熊谷、緋櫻、淺黄櫻など種類極</p>
(三三九七) (三三九〇)	後水尾	慶長三年 慶長九年 元和	

めて多きたかの珍品といはれます。

江戸駒込天澤山龍光寺に都より櫻を移し植う、よりて御所櫻と呼ぶ、寺の本堂の前にある古木の太樹として、『江戸名所花暦』に載せられ名高い。

狩野長信『花下遊宴圖』十二枚に、その頃の花見風俗の態を傳へる。

木下勝俊(長嘯子)靈山物門の外、むかしの上壇の地舉白堂に閑棲して、櫻を愛護し、翠白集を撰す。後人にそれを偲ぶ詩歌あり。一二薄曇けたかき花の林かな。

信 徳

春日奉訪長嘯公靈山

入坂東邊小路分

春風花木向欣々

我來竹下問青鳥

君在山中臥白雲

羅山文集

林羅山、東叡山寛永寺に櫻を植樹。『江戸名所圖會』に「山内櫻樹多き中にも、此邊を櫻か峯と號し、むかし羅山先生栽うるところな



明 正

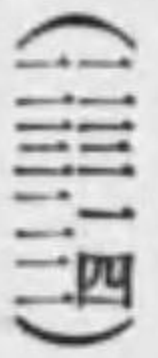
寛 永

寛 永



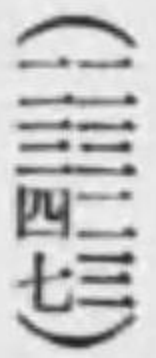
後 光 明

正 保



後 西 院

寛 文



靈 元

天 和

るよし鷲峯文集にいへり。」と見えてゐます。

東叡山上陽春衣

東叡山下背花歸

回看終日酣砂處

風起晚來爲雪飛

南 郭

島原の亂も平ぎ、正雪の騒動も鎮つて、漸く太平の世となるにつれ、士人の花見盛んになり来る。しかも、暫くは尙武の氣を失はず何事ぞ花見る人の長刀風は續きました。武士が花見遊山の閑日月の際、大かたの旗本衆は、鎗を持つて出かける風がありました。

江戸品川御殿山に、和州吉野山の櫻の苗を植ゑました。春時爛漫として尤も壯観、東都觀光隨一の名勝地となりました。

この頃は、櫻田淺草の花は衰微し、花見の人は、専ら上野に行樂する傾向をなしました。

士人も漸く鎗持の沙汰に及ばず、昇平久しきに馴れた風俗は、編笠目深に被ぎ、小袖の裏は紅絹にし、細身の大小にて婦女子の様を模するに至りました。

士人の花見盛大なるにつれ、四民行樂の時代を現出しました。又、花見風俗の一風流として辻風呂といつて、花蔭に風呂を立て

二三二八	寛文八年	東 山	るものがありました。 上野一山東叡山の櫻には種々あり、開花の遅速もありました。東都第一の花の名所として、彼岸櫻より咲き出で、一重、八重道々に咲きつき、彌生の末まで花のたゆることがありません。 (一糸櫻) 慈眼堂の前通り坊中、寒松院、等覺院、護國院。 (イヌ櫻) 彼岸櫻に似て花形大きく異なり、中堂の西、寒松院の前より谷中のかたへ行道より左の方に大樹一本あり。是當山の花の咲き初めといふ。 大佛邊、四軒寺、車坂、山王社頭、清水觀音邊、盛りである。
二三五三	元祿六年		貝原益軒『本草綱目和名目録』を作り、檢閲に便にす。櫻の項目があります。
二三五七	元祿十年		江戸染井の花戸伊藤伊兵衛『花壇地錦抄』六巻を選び、草木培養法を述べる。 京都の醫師岡本爲竹、『廣益本草大成』二十三巻及び、『和語本草綱目』一巻を著はす。櫻の項目があります。 芭蕉十哲の一人支考、東花坊と號し、櫻の句が多い。 山櫻散るや小川の水車。
	元祿	支 考	

二三六六	元祿	元 祿	小網町菓子屋の娘おあきといふ女、清水堂側、井の端の大盤若と呼ばれる櫻の花を見てよめる。 井のはたの櫻あふなし酒の酔。
二三六九	寶永三年		花見行樂最も隆盛となりました。 「さくら狩きとくや日日に五里六里」芭蕉の吟じた句によつても、粹人墨客漸く花を尋ねて狂遊する風の盛んになつた事が知られます。 東西花見の流行期に、小袖幕の美觀は、この期に於いて華奢を盡せしやうに考へられる。 『賤のをだ巻』に森山孝盛の父二條在番の折、花見するとして町人の許から女の小袖を多く取り寄せ、小袖幕を打つて、伽羅の香をこめる際、香爐の火で裾をこがした爲、償金を出したといふ。 淺草駒形堂のあたり並木の櫻が眞盛りで、『吾妻めぐり』に、「よしのの峰の春とても、これにはいかでまさるべき云々」江戸の春を頌へた文章が見えてゐます。
	寶永六年	元 祿	江戸、根津權現建立、境内に櫻を植えました。 貝原益軒『大和本草』十六巻を著はす。櫻のこと見ゆ。

二三七〇

寶永七年

中御門

正徳三年

二三七三

正徳四年

二三七四

享保十五年

二三九〇

享保

二三九三

享保十八年

二三九三

享保十八年

伊藤伊兵衛、『増補地錦抄』八巻を著はす。次の櫻の名が見えてゐます。

おほでまり、おうしゆうたでん、らいてう(來朝)、やよいざくら、まるやま、こでまり、えんめいざくら、もよどりざくら、あさぎざくら、べんどのざくら、おしゆうざくら、ちもとのざくら、なんでんざくら、うばざくら、むえもんざくら、こんわうざくら。

貝原益軒大和『芳野山櫻圖繪』を作る。

伊藤伊兵衛『廣益地錦抄』八巻を著はす。

服部範忠『本草和談』四十五巻を著はす。

隅田川堤に櫻移植さる。堤は即ち隅田村にあり、江戸第一の花の名所として聞えるに至る。豪命によつて植ゑしところのものなれば、枝を折る事を禁じてゐました。

伊藤伊兵衛『地錦抄附録』四巻、『長生花林抄』五冊を作る。

淺草寺境内に櫻が移植されました。

淺草寺へは、新吉原から寄附。これを千本櫻。或は札櫻と呼びました。

新吉原は浮かれ客の引き寄せ策に採用されたものでした。

櫻町

元文

桃園

寛保

二四〇九

寛延二年

二四一八

寶曆八年

加茂眞淵、櫻の歌をよみいづ。古今の名歌として人口に膾炙する。

うらうらとのどけき春の心より

匂ひ出でたる山櫻花。

加茂眞淵

小金井に、櫻が移植されました。

小金井の櫻は、川崎是孝なるもの八代將軍徳川吉宗の命を奉じて大和の吉野と、常陸の櫻川から移植したものである。小金井の櫻ははじめから觀櫻の目的でなく、櫻は水道を解するといふ傳説から水を飲む者の水毒にあたらぬやうにとの用意に植ゑられたものであります。

徳川吉宗、飛鳥山に櫻を移植せしめる。花見時には、近侍の女士に、行厨酒果を賜ひて、隅田と、飛鳥山の兩所に遊ばせしむる。

「今日は遊人多かりしや、土人も潤澤をうるさまなるや」

など尋ねその楽しみを同じくした。と傳へられてゐます。

新吉原、鉢植の櫻はじまる。

松岡氏の遺稿『怡齋公品』『怡齋介品』刻成る。その品種は頗る多い。

二四二五	後櫻町	明和二年	いとくぐり、(一名大てまり) いちもんじ、いせざくら、ろうまざくら、はたざくら(一名帆掛櫻)、にはひざくら、はたてざくらほうりんじ、ほうらいじ、とらのをとのざくら、とやまざくら、ちござくら、ちもとのざくら、おほてまり、おほてうちん、おそざくら、わかきのざくら、おものざくら、わしのを、をかいどうざくら、かばざくら(花黄)、たいさんふぐん、うすずみざくら、くまかへざくら、やへひとへ、やうきひ、やまざくら、ふげんざら、こまつなぎ、こよのへざくら、こざくら、ごしよざくら、えどざくら、てまりざくら、ありあげざくら、あかつきざくら、あさぎざくら、さかてざくら、さつまひざくら、ゆきやまざくら、しろざくら、しほがまざくら、ひがんざくら、ひざくら、せうくんざくら。
二四二六	明和三年	島田充房『花鏡』八巻を選び草木各百種の圖説を作る。其木部四巻は小野蘭山の圖する所なり。 八月伊勢神宮の神宮度會常民『本草品彙』十一巻を作る。 本居宣長櫻の歌をよみいづ。古今の名歌として傳へらる。 敷島の大和心を人間はば 朝日に匂ふ山櫻花。 本居宣長	

二四五六	光格	天 明	櫻屋敷の彼岸櫻名を高うす。江戸番町既谷杉田家の屋敷を花屋敷といふ。佐野善左衛門の屋敷である。大樹にして櫻屋敷とも唱ふ、後既谷松平氏の屋敷となる。 丹波元簡幕府の書庫より深江輔仁の奉勅撰述する所の『本草和名』二巻を檢出し之を上木す。 小野職孝王父蘭山の本草講義を筆記し四十八巻となし、『本草綱目啓蒙』と題し世に公にす。 向島三圃稻荷では、花見の客をあて込み、開扉大祭を執行した。この時、紙で造り畫にかいた天狗の鼻みのを製し、これを緒に通して商ふ者があり、非常なる流行を極める。 爾來花見の假面の新案される傾向が助長されました。 一年の花てふ花を集めても 櫻にたぐふ花やなからん。 小澤 蘆庵
二四六三	享和三年	『玉花勝覽』の著者、露庵有佐、小金井遊覽に便して、この地に杖を曳くものを繁からしめる。 三月小金井櫻樹碑か建てられる。 遊人毎春相倍蓰、野路綿々人肩驢馬蹄連	
二四六四	仁 孝	文化元年	
二四七〇	文化七年		

二四八五	文政八年	文政	<p>徳川旗本の間、遠乗の花見が流行しました。</p> <p>尾張國堀川の櫻を植う。兩岸日置場より北の方西水主町まで數町の間、數百本の櫻並樹をなして彌生の頃は貴賤袖をつらねる。岸に往きかふ羣集水には舟を浮べて、上下に花を賞するさまながら嵐山隅田川の春興にも劣らぬ勝地なり。」と『尾張名所圖會』は記してゐる。これ、文化年中、府の世臣堀氏數百根の小樹を載並したものはじまる。</p> <p>毛利梅園『花圖』十八卷を作る。</p> <p>徳川家齊、櫻花を愛すること深く、所司に命じ、名所の枯株に植繼せしめる。</p> <p>爾來花は一層の繁華をなす。</p> <p>當時、上野の山では、山同心が筵席を貸し、香煎湯を賣つた。</p> <p>上野山は、夕暮六つの鐘を合圖に山を下らねばならぬ制度がありました。暴行者は、直ちに黒門外に追ひ出された。それで婦人等も安心して遊興が出来ました。</p> <p>「また見る宮女件を結び、翠袖霞を被き、宮鬢を簇す、靚麗股冶を競ひ、妍を闘す」</p> <p>と、御殿女中の群が多く上野の花を享樂しました。</p> <p>當時、平民は時限があるのを嫌ひ、隅田堤、飛鳥山に行くことを</p>
------	------	----	--

二四八七	文政十年	文政	<p>多くしました。</p> <p>青山植木屋金太、『草木奇品家雅見』三卷を刻す。うちに見える櫻の品種</p> <p>よしのやま、みくるまかへし、みやまがへし、みやまざくら、しろまひざくら、あらしやまざくら、しろひよどり、ほりりんじ、たいさんぶぐん、つまぐれない、ふげんざら等。</p> <p>三月龜田鵬齋が作書した詩碑が木母寺畔に建てられる。</p> <p>「長隄十里白無痕、訝似澄江共月渾、飛蝶還迷三月雪、香風吹度水晶村。」</p> <p>その附記文に、</p> <p>「隅田櫻花豈徒頼珠三白解、玉樹千萬枝、長隄作十里錦步障」など見える。</p> <p>水野逸齋『草木錦葉集』七卷を著はす。</p> <p>紀州の人坂本浩然『百花存真圖』一卷を著はす。</p> <p>坂田三七郎墨堤に櫻を補植す。</p> <p>飯沼愨齋『草木圖說』三十卷を著はす。</p> <p>坂本浩然『百花圖纂』一卷を作る。</p>
二四八九	文政十二年	文政	
二四八九	天保二年	天保	
二四九二	天保三年	天保	
二四九三	天保四年	天保	

二四九五	天保六年	三月尾張水谷義三郎、伊藤圭介、石黒正敏等本草會を、名護屋一行院に開き、「本草會物品目錄」一卷を作る。
二四九九	天保十年	屋代弘賢、「古今要覽」をあらはす。うちに、エトロフざくらを載す。
(二五〇七)	弘化	宇多川總兵衛墨堤に櫻を植ゑつぐ。
二五〇九	嘉永二年	代官大熊氏。田無村の名主半兵衛をして小金井堤に櫻を補栽せしむ。
(二五〇八)	嘉永	幕末黒船來るに驚かされ、品川灣に砲臺を築くにあたり、江戸品川御殿山惜しくも崩され櫻の名所を失ふ。
(二五〇三)	永	八田知紀、大和の吉野山の歌を作る。
		吉野山霞の奥は知らねども 見ゆる限りは櫻なりけり。
二五二七	安政四年	淺草觀音堂の周圍に、櫻千本を植ゑる時の俳人の句に、 そよつくや千もとの中の初櫻。
		昔見ぬ春あり花の淺草寺。 鳴る鐘の花にひびきて今年かな。
二五二四	元治元年	佐久間象山、櫻の賦を著す。

(明治以下略)

櫻年表

(非賣品)

昭和十一年四月八日印刷
昭和十一年四月十一日發行

著者 藤澤衛彦

發行者 小沼昇

東京市四谷區三丁目八番地

發行所 伊勢丹

東京市四谷區三丁目八番地

印刷所 中屋三間印刷株式會社

東京市京橋區築地四丁目四番地

終

